

# 一七世紀の南インド社会とイエズス会

——『フランス版イエズス会士インド書簡集』の翻訳と注解(一)——

重 松 伸 司  
天 野 知 恵 子  
高 木 勇 夫

## 三 「第一書簡」

(一) 試訳

ヘイエズス会マドゥライ教区长レネ神父より同教区内神父宛。一六九三年二月十日付。ポルトガル語より(フランス語に)翻訳。尊師ジャン・ドゥ・プリト神父の御逝去について。

我が親愛なる会士ジャン・ドゥ・プリト神父の死について

て、私たちは深く悲しむべきでありましょうか。そして、ひとりの熱情にみちた牧者、疲れを知らぬ伝道者をたった今失ったのでありますが、そのことに涙すべきでありましょうか。あるいはまた、この教会が天に送りしイエスキリストの高潔な証聖者の死によって、設立間もない我れらが教会が授かる利益を喜ぶべきでありましょうか。なぜならある教父の言う如く「殉教者の血が新たなキリスト教徒を生み出す豊かな種子」<sup>(1)</sup>だとすれば、この地のキリスト教徒達が百倍にも実を結び、「東洋」のあらゆる広大な国々に広まることを十分に望めるのではないでしょう。

でありますから、導師の皆様、この教会に殉教者をお与え下さり、我が兄弟の一人に、イエスキリストの宗教のため、光栄にも血を流させ給うた神に対して、私とともに感謝を捧げようではありませんか。この恩寵は私たちにとっては地上の如何なる成功よりもはるかに価値あるものであります。私たち自身もやがて（ブリト神父のように）死ぬべき運命にあるとすれば、それは何という幸せなことでありましょう。

不信心の故に名譽ある死にふさわしからぬ行いのないようにならねば。我われの情熱を燃やして、一層勇氣をもって熱心に、救世主の血によってあがなわれた異教徒たちの救済にあたりましょう。そして我れらが聖なる会士の殉教が、同じ恩寵を受けるためには、身を持せよ、心せよとの神の励ましの声であると思ひましょう。

御存知のように、六年程前、マラヴァの領主<sup>(2)</sup>ランガナダ・ドゥヴァン(Ranganada deven)はジャン・ドゥ・ブリト神父に残酷な拷問を加えたあと、師がこの国にとどまって福音を説けば、死罪にするといつて禁じました。彼はその命令に従わなければ、八つ裂きにすると言いつて神父を脅迫しました。その時、教区長であった神の僕ブリト神父は、不信者の領主を怒らせぬため、再訪を願いつつただちにマラヴァを

退いたのであります。というのは、師は非常な心づかいと労苦を重ねて築きあげた多くのキリスト者達をそっくり見捨てる程の決心がつかなかったからであります。また、師は自からへの脅迫をおそれるどころか、信仰の為に死ぬという名譽が自分のうける至福だと思つておられたからなのです。しかし、神はその時は師のよきころざしにのみ満足されました。師がまさにマラヴァにもどろうとした時、我れらが教区長達はこの（マラバルの）管区長の資格で神父をヨーロッパに送りました。師はその命に従い、一六八七年の暮にリスボンに到着いたしました。

ポルトガル国王は師をおぼえておられ——師は名譽なことに王のおそば近くで教育を受けられたのです——師の帰国に大変な喜びを示されて、重要な役職につけて神父を宮廷に引きとめようとされたのです。しかし異教徒たちの改宗のことに念頭のない聖人はこれを固く辞退いたしました。彼はうやうやしく国王にこう申しました。「陛下は光栄にも私に擬せられた役職にふさわしい人々をこの国にいくらでもお持ちでございます。しかし、マドゥライの教区には働き手はほとんどございません。この広大な野を拓くために多くの人々がやってくるようになった時、私はその人達よりはこの地の言

葉を知り、この地の民の風俗やしきたりにも通じ、尋常ならぬこの地の生活そのものにも慣れております故、お役に立つと思っております。」

ドゥーブリト神父はこのようにして、ともかくポルトガル王宮での滞在をまぬがれ、任務をすませると、リスボンをばなれてインドへもどることしか考えておりませんでした。ゴアに着くや師はただちにマドゥライ教区にもどる手だてを講じましたが、教区の巡察官(Visiteur)に任命されていました。師は教会の建設に情熱を傾けていたので、長旅の疲れをいやすいとまも、船中でかかった重病から回復する時間もなくったのです。神父はゆだねられたばかりの新しい任務を果す為に全力を傾けました。まず、マドゥライにあるすべての教会を訪問することからはじめ、次いでマラヴァの近くまで赴き、師を懐かしむキリストの子らを訪ねましたが、彼らは神父の無上の喜びでありました。この国の森の中には、御存知のように、いくつかの教会があります。師は疲れを知らぬ情熱を持ち、不便をおして、すべての教会を巡察しました。異教徒の祭司達は怒り、その憎しみのために、師の生命までもが危ぶまれる程で、大きな危険を冒さずには、二日と同じところに滞在しえない程でありました。しかし、こうした危

険と疲労の中にあつて、神は使徒としてのつとめに対してお与えになった大いなる祝福でもつて、神父を支えられたのであります。

ヨーロッパから帰つて死を迎えるまで、マラヴァに滞在していた一五ヶ月の間、神父が八、〇〇〇人の洗礼志願者に洗礼を授け、その国の主だった領土一人を改宗させたのは、大きな喜びでありました。その領主とは、テリアドゥヴァン(Teria devan)<sup>(4)</sup>であります。マラヴァ領国はもともと彼に属するはずであつたのですが、彼の先祖達は、現在そこを支配しているランガナダドゥヴァン<sup>(5)</sup>の一族によって国を奪われってしまったのです。テリアドゥヴァンは、その生まれと才能によつて国のすべての人々から注目され、愛されていたので、彼の改宗は大きな反響をひきおこし、結局ブリト神父の死の原因となつたのであります。この領主は土地の医師達が不治の病と診た程の重病にかかつておりました。偽りの神々からは何の慰めも得られず、死の床にあつた彼は、キリスト教徒達の神の救いを求めようと決心しました。そのため、彼は神父か或いは少なくとも説教師を一人自分のもとに送つて、福音の教えを授けてくれるように幾度か懇願してきました。彼は、福音の真理を全く信ずると申しました。師はただ

ちに彼の望みをかなえてやりました。説教師が病人を見舞に行き、彼に聖なる福音を語って聞かせるや、たちまち病人は完全に治ってしまいました。

かくも明白な奇蹟が生じた為、テリアドゥヴァンは聖霊にして驚嘆すべき法を説教する人に会いたいという願いを一層つらせたのであります。まもなくしてその望みはかなえられました。というのは、それまでこの領主の意図が誠実かどうか疑っていた師が、ちゅうちょなく彼の領地に赴き、この地では偶像崇拜の祭司達にあやしまれることもなかったのです、公現祭をとり行うために、彼地に数日間滞在したからであります。この儀式は、キリスト教徒の側のひとかたならぬ献身とともに、大成功をもたらしたのですが、それはプリト神父自らが二〇〇人の洗礼志願者に洗礼を施したことであります。神の僕がのべる生き生きとした、活気に満ちた言葉や、情熱。新しいキリスト教徒達を生み出すという喜び。教会の儀式の尊厳。そしてとりわけ、テリアドゥヴァンの改宗の為に、この好機を待っておられたイエスキリストの恩寵がこの領主の心を激しく打ったので、彼はすぐにも聖なる洗礼を受けたいと願ったのです。師はこの領主に申しました。「あなたは誓願式で守らねばならぬ生活の純粋なることを未

だわかってはおられぬ。あなたにこの秘蹟を受けることを教え、心づもりをさせる前に、私が洗礼の恩寵をあなたに許せば、私は神の前に罪を犯すことになりましょう。」

師はそれから彼に福音書が結婚について規定していることがらを説いて聞かせました。この点は特に必要なことであります。なぜなら、テリアドゥヴァンは現に五人の妻と多くの妾を持っておりましたから。

伝道者の話は、この新たな洗礼志願者をしりごみさせるどころか、彼を勇気づけ、洗礼への熱意と渴望を生じさせるばかりでした。

「洗礼のさまざまげとなることはじきにやめてみせましょう。そして、師はきっと私の行ないに満足していただけると存じます。」彼は師にこう答えました。すぐに彼は宮廷にもどり、妻達をみなよび集め、自分が聖なる福音の徳によって真の神から受けた奇蹟的な病状回復のことを彼女達に語ったのちに、自分は大変力のあるしかも良き師への奉仕に残る人生を捧げようと決意した、この聖なる主は二人以上の妻を持つことを禁じている、自分は神に従いたいので、以後は一人しか妻を持たない、とのべました。彼は自分が捨てることになる妻達を慰める為、彼女達のめんどろを見、何にも不自由させず、

いつも身内の姉妹同様に彼女らを扱うとつけ加えました。

あまりにも思いがけない言葉に、この妻達はひどくおどろいてしまいました。一番若い妻がもっとも激しく動揺しました。はじめ、彼女は夫を説得し、決心を変えさせる為に、哀願し、とめどなく涙を流しましたが、その甲斐もないと知るや、もはや策つきて、ブリト神父とキリスト教徒達に対して、自分がこうむったと思ひこんだ不正の仕返しを決意しました。彼女は私が先にふれたマラヴァの領主ランガナダ<sup>II</sup>ドゥヴァンの姪でありました。彼女は伯父のもとにゆき、夫の軽率さについて不平をこぼしました。彼女は嘆きわめいて自分が陥った悲しい状況を、るのべて、伯父の權威と裁きを求めたのであります。彼女は伯父に、テリア<sup>II</sup>ドゥヴァンの決心がほかならぬ「東洋」のもっとも思まわしい魔術師の行為に身を委ねたことが原因であり、この男が彼女の夫に魔法をかけて、恥ずべきことにも、一人を除いて、彼女や他の妻すべてに離婚するように説いたのだと語りました。しかし、自分の考えをさらにうまく実現する為、彼女はさらに激しい執拗なやり方で、長い間福音の司祭達に怒りを爆発させるチャンスを得らっていた偶像崇拜の祭司達に話したのです。

その中に、ポンパヴァナン (Pompavanan) という名のバ

ラモンがおりましたが、彼は人をたまたす言葉にかけて、また布教師達、ことにブリト神父に対する激しい憎悪をいだくことで知られておりました。この意地の悪い男は、彼の偶像の名誉をつぶし、弟子を奪い、その為、家族ともども極貧状態に陥し入れた人物に復讐するかくもよい機会を得て、有頂点になりました。そこで、他のバラモン達を集め、彼らとともに、聖なる伝道者を滅し、新しい教会をこわす手だてを講じました。彼らはそろって、領主に話をしに行くことに決めました。ポンパヴァナンは彼らの先頭に立って口火を切りました。彼はまず次のように不平をのべたてました。すなわち、もはや(インドの)神々に対して尊敬が払われていないこと、幾つかの偶像は倒され、寺院の多くは見捨てられていること、もはや祝祭の供犠はなされず、民はみなヨーロッパ人の恥ずべき宗派に従っていること、神々に加えられている侮辱にはもうこれ以上我慢ならぬこと、自分達バラモンは近くの国々に退去しようとしていること、というのを神を否定する者やこんな大罪を罰するべきなのに醜聞にまみれながらも罪を許してきた連中に対して、怒りの神々が下そうとされる復讐を目のあたりにしたくはないと考えていること……を。

すでにブリト神父に対して悪意を抱いており、姪の歎願と

涙に激しくせがまれ、その上彼の考えるところでも、テリア  
＝ドゥヴァンを好むべくもなかったランガナダ＝ドゥヴァン  
を動かすことはわけもないことでありました。ランガナダ＝  
ドゥヴァンはすぐさま領内すべてのキリスト教徒達の家を襲  
い、信仰を頑くなく守る人々に対しては重い罰金を払わせ、  
ことに、すべての教会を焼くように命じました。このきびし  
い命令は、その通り実行され、非常に多くのキリスト教徒の  
家族が完全に破産してしまふ程でありました。というのは、  
彼らは信仰を捨てるよりも財産を失うことを望んだが故であ  
りました。ブリト神父に対する仕打はさらにもっときびしい  
ものでありました。ランガナダ＝ドゥヴァンは師を秩序破壊  
の元凶と考えておりましたので、神父をとらえて自分のとこ  
ろに連れてくるようにと申しわたしました。この野蛮人は、  
神父に厳しく対することでキリスト教徒をおどし、その決意  
を翻えさせるつもりでありました。

その日、一六九三年一月八日。聖なる伝道者は、多くの信  
心深い人々に秘蹟を授けたのですが、自分に対して何かたく  
らまれているのではないかと思つたのか、或いは、我々の思  
い及ばぬ方法で確信を得られたのか、集まったキリスト教徒  
達に、彼らがおびやかされている血なまぐさい迫害を避ける

為、退去するよう勧めました。数時間後、一団の兵士達が師  
を捕える為にやってくるかと告げられました。師は少しもあわ  
てず笑顔で彼らの前に進み出られました。だが、この不信心  
者達は、師を見つけるが早いか情容赦なくとびかかり、力づ  
くで地面に押し倒しました。彼らは神父に従つていたジャン  
という名のバラモン出身のキリスト教徒をも神父同様に扱  
いました。兵士達はこの二人をきつく縛りあげましたが、彼ら  
は自分達が耐えている苦痛よりも、神に発せられる冒瀆の言  
葉にひどく心を痛めておられました。ブリト神父についてい  
た二人の幼ない子供のキリスト教徒達——年上の子もまだ一  
四才になつていませんでしたが——は、神父に加えられた残  
酷な仕打や恥辱に怯えるどころか、信仰の心を奮い立たせて、  
信じられぬ程の情熱をもって鎖につながれていた聖人にすが  
りつこうとして走り寄り、師から離れようとはしなかったの  
であります。おどしても撲つても、子供達を引き離せぬとみ  
ると、兵士達は二人の罪なき犠牲者をもしぼりあげ、彼らを  
神父や牧者とともに連行しました。

こうして、四人ともみな歩かせられたのです。しかし、か弱  
い体質で、また長く辛い仕事や二〇年以上もマドゥライで送  
つてきたきびしい生活の為、力を使い果していたブリト神父

は、その時ひどく弱られてしまったようであります。勇氣をふるっても、ほんのしばらくしかもちたえることができませんでした。ほどなくして、彼はひどく疲労困ぱいし、ほとんど一歩あゆむ毎に倒れてしまいました。兵士達は先を急ぐあまり、師の足が血まみれになり、おそろしくはれ上がったにもかかわらず、力づくで立ち上がらせ、歩かせたのでした。

聖なる主が、カルヴァリオに向かわれたのもかくの如し、  
と思えるような状況の中で、一行はアヌーマンダンクーリ(Anounandancouri)<sup>(7)</sup>という名の大きな村に着き、そこでイエスキリストの信仰告白者達はあらたな侮辱を受けたのであります。なぜなら、この新しい見世物に各地から駆けつけてきた群衆の気に入るように、バラモン達が、意気揚々と偶像を乗せて街をねり歩くならわしとしていた山車の上に高々と彼ら四名は置かれたからです。そこで一日半、彼らは公衆の嘲笑にさらされました。そしてそこで飢えや渇きやつながれている鎖の重みなど多くの苦痛をなめました。

このようにして集まってきた連中の好奇心と怒りとを満足させた後、一行はマラヴァの領主の宮廷があるラマナダブーラム(Ramanadabouram)<sup>(8)</sup>への道中が続けられました。そこへ着く前に、彼ら一行にもう一人別のイエスキリストの信仰

告白者が加わりました。この人は伝道師ムタパン(Moutape-  
rou)<sup>(9)</sup>で、カンダラマニコム(Candaramanicom)で捕えられたのですが、神父は自分の建てた教会の世話をする為にそこに彼を派遣しておりました。兵士達は命令に従って教会を占拠した後火を放ち、キリスト教徒の家を引き倒し、この伝道師をきつく縛りあげてラマナダブーラムの町へ連れてきたのであります。このめぐりあいはすべての神の僕たちに喜びを与えました。プリト神父はこの機会を利用して、情熱をもってあくまでもイエスキリストへの信仰告白を続けるようにと彼らを励ましました。ランガナダドゥヴァンは、この栄光にみちた信仰告白者達が彼の都に着いた時、そこから数里離れた所にいたので、彼らを牢につなぎ、自分が帰るまで厳重に監視するように命じました。

ところで、熱心な洗礼志願者であるが、思いもよらぬ迫害のきっかけをつくった領主テリアドゥヴァンは、肉体と精神を長らえさせてくれた恩義を感じている人の特赦を得る為、宮廷に赴きました。神の僕が道中で残酷に扱われてきたことを知ると、彼は自分の尊敬する捕われ人に、もつと思いをかけてほしいと兵士達に頼みました。最初この領主の勧告にはいくらか配慮がなされました。神父は以前程はひど

くとり扱われなくなりましたが、それでも大変な苦痛に耐え、一日一度与えられる少量のミルク以外には栄養は何も取らずに何日も過ごさねばなりませんでした。

この間、偶像崇拜の祭司達は、マラヴァの領主にイエスキリストの信仰告白者達を死刑にするよう新しく働らきかけておりました。彼らは大挙して宮廷に押しかけ、キリスト教に對するいまわしい冒瀆のことはを吐き、神父に大きな罪をきせようとなりました。彼らは誰も神父の教える法に従うような大胆なことをしないように、領主が公の場で彼を絞首刑にするように、とひどくしつこく要求しました。寛大なテリアドゥヴァンは、この不当な要求がマラヴァの領主に出された時に、領主のかたわらにいたのでしたが、このことに怒り、処刑を促す偶像崇拜の祭司達にひどく腹を立てました。彼はそれからランガナドゥドゥヴァンに進言し、彼のもとに真の神の教理を持つ新しい学者(プリト神父)と討論させる為に、もっと有能なバラモン達をよびよせてほしいと頼み、この論争が真理を見出す確実で容易な方法であろうと付け加えました。

領主はテリアドゥドゥヴァンの不躰に腹を立てました。彼は怒って、テリアドゥドゥヴァンが異国の教理を説く学者の、恥

ずべき一派を支持しているのではないかとがめ、その場で堂に安置してあるいくつかの偶像をあがめるように命じました。この寛大な洗礼志願者は、こう答えました。「私がそんな不敬なことをすれば、神に對しても面目がたちませぬ。聖なる福音の徳によって、死の病から奇蹟的に回復してからまだ間もありません。そのあとで、偶像をあがめる為に信仰をやめ、魂と肉体とを同時に失うようなことが、どうして私にできましよう。」

この言葉は領主の怒りを増すだけでありました。しかし、状況を考えて彼は怒りを爆発させるのは適当でないと判断しました。彼はお気に入りのプーヴァル<sup>(9)</sup>ドゥヴァン (Pou-varou devan) という名の若い貴族に同じ命令を下しました。この人も、しばらく前には九年間患っていた大変やっかいな病氣から洗礼によって回復したので、最初はためらっておりました。しかし、ひどく怒っている領主の不興をかうことを恐れて、命令に盲従してしまいました。供儀を捧げようとするや否や、彼はまず激しい苦痛に襲われ、ほどなくして、非常な苦境に陥ったと思つた程でありました。このように即座のしかもまことに恐ろしい罰によって、彼は我にかえりました。彼は卑怯にも今捨てたばかりの神にすがり、十字架像を



もってきてほしいと願ひ、その足元に身を投げ出しました。そして卑屈にも、犯したばかりの罪の許しを乞ひ、主に對して自分の肉体に同情を願うとともに、魂をもあわれみ給えと願うのであります。祈りを終えるや否や、願ひは叶えられたように思われました。深い慈愛をもって彼の健康をとりもどしてくれた神が、また慈悲を施し、彼の墮落を許してくれたことを彼はもはや疑いませんでした。

ブーヴァル―ドゥヴァンが偶像に供犠を捧げている間に、マラヴァの領主は再び、テリア―ドゥヴァンを脅迫しながらこの貴族にならうよう命じました。しかし、テリア―ドゥヴァンは潔よく、大それた不敬など犯すよりは死んだ方がましだと言ひ返し、領主が彼を説得しようなどと望まないようにとのべ、また、聖なる福音の徳を語り、キリスト教を賞讃しつづけておりました。領主はかくもすっかりした返答に怒りをつのらせて、彼をさえぎり侮辱したようにこう言ひました。「よろしい、お前が崇める神の力が如何なるものか、またお前のふらちな学者がふきこんだ教理の徳とはどのようなものか、お前にもわかるようになるう。きっと三日以内はこの悪党めが体に手をかけられるまでもなく我れらの神の力だけで死んでしまふぞ。」

こう言うや否や、領主はヒンドゥッ寺院の偶像の為に、パテイラガリプシ(Patragalipouch)<sup>(10)</sup>とよばれている供犠を行うよう命じました。それは異教徒達が非常に大きな力があると信じている一種の呪文で、これには逆らうことができず、犠牲の対象とされた者は必らず死ぬに違いないと信じられていたのであります。その為、しばしば、敵を滅ぼしてしまうというサントウロヴェサンガラム(Santourovesangaram)とよばれています。偶像崇拜の領主は三日間というもの、ずつとおぞましい礼拝を続け、数種類の供犠を捧げて魔力の効めをおとろえさせないようにしておりました。その場には、何度かイエスキリストの証聖者のおしえをきいたことのある異教徒数人がいました。彼らはどんなに骨折つても無駄で、どんなまじないも異教徒の神々を侮蔑している者には効きめがないと説明しましたが、無益でありました。このことが領主をひどくいらだたせました。そして最初の呪いが効きめをあらわさないで、どこかお膳立てがまちがっているのだと思つて、同じ供犠を三度も奉じたが成功しませんでした。

偽りの神々に仕える主な聖職者のうち何人かは、当惑し混乱しきっている領主を救おうとして他の種類の供犠を捧げる

許しを彼に求めました。彼らの言うところによると、これに抗する術はないという呪文を捧げたいと、申し出ました。これがサルペシウム(Salpechium)<sup>11</sup>であり、彼らの言うには、確実な効果があって、神でも人間でもその効力をまぬがれることのできる力はないということでありました。このようにして彼らは伝道者ブリト神父が五日目には必らず死ぬと断言いたしました。かくもはっきりとのべたので、ランガナダ<sup>12</sup>ドゥヴァンは少し落ちつきました。彼は自分が鎖につないで軽蔑しているたった一人の男に、自分もすべての神々もすっかりやりこめられてしまったので、万策つきた思いをしていたので。

しかし、サルペシウムを行って五日たっても、完全に滅ぼされているはずの聖人が髪の毛一本も失っていないと知った時、領主と偶像崇拜の祭司達はまたまた混乱に陥ってしまいました。

バラモン達は暴君にこうのべました。新しい教理を説くこの学者は世界でもっとも偉大な魔術師の一人であり、その魔力によって我々が行なったあらゆる供儀の効きめをさまざまにげているにすぎないと。ランガナダドゥヴァンはすぐにこの意見をうけ入れました。彼はブリト神父を自分の前に引き出

し、師を投獄した時とりあげた聖務日課書を見せて、今まで自分達が行なった魔術の効めをなくしていたのはこの本からではないかと質問しました。聖人はそのことを疑ってはならないと答えたので、暴君はこういいました。「なる程、この本がお前をマスケット銃をも受けつけないようにするかみたいものだ。」同時に彼は師の首に聖務日課書をくくりつけて銃殺するように命じました。テリアドゥヴァンが勇を鼓して、このような非道な命令に対してはっきりと抗議の叫びをあげ、兵士達の間にいった時には、すでに兵士達は射撃を行うばかりでありました。彼は自分の大切な師の生命が奪われるのなら、自ら死を選ぶときっぱりと申しました。ランガナダドゥヴァンは、軍隊の中に何がしかの動揺が生じたことに気づいて、反乱をおそれました。というのは、テリアドゥヴァンにはまだ何人かの支持者がおり、その支持者達はこの領主が公然と侮辱されるのを黙視しはしないだろうと、ランガナダドゥヴァンは考えたからです。このような思惑があつて、彼は怒りを鎮めました。彼は与えた命令を取り消すふりさえて、イエスキリストの証聖者を再び獄につなぐように命じました。

しかし、その同じ日に、彼は神父に死刑を申しわたしたの

です。そしてこの判決が支障なく執行されるように、自分の兄弟である、ウリア・ドゥヴァン (Uriar deven)<sup>(12)</sup> のところへ神父をつれてゆくように命令を出し、十分な護衛をつけて出発させました。ウリア・ドゥヴァンは宮廷から二日の行程のところに住みついている部族の長でありましたが、そこですみやかに神父を処刑しようとした。神の僕にこの決定がしらせれますと、師は自らがあれ程の情熱をもって願ったことがまちかであると思んだのですが、自分とともに獄中にいるイエスキリストの可愛い子供達と別れるつらさにはしばしば気がふさぐのでありました。別離の為、神父は大変涙もろくなり、彼らに永遠の別れをつける時、涙をこらえることができませんでした。師は四人を一人ひとりやさしく抱擁し、彼らによくわかるように、またおかれた状態にふさわしい理由をあげて、その一人ひとりをしっかりと元気づけました。それから彼ら全員に話しかけ、感動的で悲壮な説教を行ない、信仰告白において堅固であり、また彼らが生命を授かった真の神の為に、その生命を潔ぎよく捧げるようにと、彼らを励ましました。その場に居合せた異教徒達も心を動かされて涙まで流しましたが、まもなくやってくる死に対しては何の恐れももたぬかに見える神の僕が、弟子達には優しさを示して

いることには、十分に心を動かすことはできませんでした。それでも彼らは、神父を除く他の四人のイエスキリストの証聖者達の、救世主への愛の為に自らの血をすすんで流すという聖なる決意を知って驚きました。こうして師はラマナダプーラムの獄を出しましたが、師のあとを追って、師とともに死にたいという弟子達の切なる望みは続きました。

師は護衛の者達とともに夕方頃出発しました。しかし、先の旅よりも一層疲れきっていたので、信じられぬ程の辛苦をともなうて殉教の地にたどりつきました。処刑の前に息を引きとることを恐れたものか、はじめは師は馬に乗せられておりました。が、すぐあとでは、師は馬からおろされました。師は裸足で歩きましたが、何度も倒れ、膨れあがっていた足はひどく痛みました。血の跡で彼の歩いたあとをたどることができる程でした。しかし、護衛の者達が、師はもう全く立っていることができないとみて、情け容赦なくひきずり始めるまで、前に進もうと師は努めました。

この大変な疲労と苛酷な扱いの上に、三日に及んだ道中、師には食べものとしてほんのわずかのミルクしか与えられませんでした。それ故異教徒達でさえ、道中をおえるまで師が耐えておられたことに驚き、キリスト教徒達は、このことを

神の特別の恩寵だと考えました。

このまことに使徒にふさわしい人が一月三十一日殉教をとげるはずの地オレジュール (Orejour)<sup>(1)</sup>にたどりついた時は、以上のような悲惨な状態でありました。オレジュールはマラヴァ領国とタンジヤール王国との境にあるパンバルー川 (Pambarou)<sup>(2)</sup>に面した大きな部落であります。残酷なランガナダドゥヴァンの兄弟で、彼よりもっと非人間的なウリアドゥヴァンは神の僕が到着したのを知ると、自分の前につれてくるように命じました。この野蛮な男は最初、神父を大麥丁重に扱いました。彼はここ数年来目が不自由になり、手足もしびれていたのですが、聖なる福音によって施された神の奇蹟をしばしば聞き及んでいたので、自分の思いのままになるこの新しい教理を説く学者が、自分に対しても恩寵を授けることを拒むことはなからうと期待をいくばくかもっておりました。それ故最初の謁見では宗教のことしか話題にせず、神父に対してかなりやさしく遇したのであります。次の日、彼は妻を全員師のところに送りましたが、彼女らは師の足元にひれ伏して、夫の健康をとりもどしてくれるようにと懇願いたしました。プリト神父が何の約束もせず彼女達を送り返したので、ウリアドゥヴァンは師を呼び出し

て、自分の為にあの奇蹟を行うにはどれ程の代価がいるのかと問いました。彼はまず、望んでいることをもし叶えてくれれば、牢から出して死を免ずるばかりか、目の前にある富を一杯やろうと約束しました。熱心な伝道者は次のように答えました。「そんな約束であなたの健康をとりもどさせようと私に強いてもだめです。仮に私にそうできたとしても死への恐怖の為に私がそうしたのだとお考えにならないで下さい。その恩恵をあなたに与えるのは無限の力を持つ神のみしかないので。」

この野蛮な男はこの答にショックをうけてただちに囚人を牢につれもどし、処刑の道具をすぐにも準備するよう命じました。しかし処刑は更に三日間延ばされ、その間、神父には、いつもよりもっと少ない量の食事しか与えられませんでした。その為、師を剣でいそいで殺さなかったとしたら、おそらく師は飢えと苦悩とで死んだことでありましょう。殉教前日の二月三日、師は私に通の手紙を残すべ、を考え出されました。その手紙はこの教区のすべての神父にあてられたものであり、貴重な聖遺物として私が保管しております。師はペンもインクもなかったので、手紙を書くために、一本のワラと、水に溶かした少量の炭の粉を使われました。その手紙

の文面は次のようなものであります。(以下 文面略)

(二) 注解

- (1) ラテン教父テルトゥリアヌス (Tertullianus, c160-240) の *Apologeticus* 中のことば。更に『新訳聖書』「ヨハネによる福音書」第一二章、二〇節中には「一粒の麦が地におちて死ななければ、それはただ一粒の麦である。しかし、もし死ねば豊かに実を結ぶようになる」という有名な文句がある。(高木注)

(2) <マラヴァの部族集団について>

マラヴァをどのような社会集団と考えるかという問題は、単に南インド社会の特定集団を民族学的に分類する意味だけではなく、次のような理由で重要な意義を持つ。すなわち、当時の有力な在地支配者及びその集団がカーストとしての階層形態・秩序をもっていたのか、或いは部族としてのそれらを維持していたのかという点は、イギリス支配前とりわけ一六一—一七世紀の南インドに、どの程度ヒンドゥの支配権力——換言すれば、正統ヒンドゥイズムに規範を求める支配原理——が浸透し、確立していたのかという問題と深くかかわる。私は南インド南部——特に後のブドゥコッタイ、マドゥライ、ラムナード各県及びタンジール県の一部——地域では、一七世紀においてもなお部族的性格を保持する在地有力支配層が定住していたこと、彼ら土着の集団内部の階層関係、及び土着集団とナーヤカとよばれる「領主」との関係を明らかにすることによってこ

そ、ヴィジャヤナガル王朝の権力構造が明らかになることを仮説的に提示しておいた。(一七世紀の南インド社会とイエズス会——『フランス版イエズス会士インド書簡集』の翻訳と注解(一)——『名古屋大学東洋史研究報告』6、一九八〇年八月)

ブラーフマニスム或いは正統ヒンドゥイズムの宗教規範がどこまでヴィジャヤナガル王朝の中に取り入れられ、政治支配の実践的な秩序となっていたかという点については、南インド中世政治思想史の研究が十分でない状況から、必ずしも断定的にいえないが(宗教運動や宗教史の研究としては、例えば、K. R. Subramaniam, *Origin of Shaivism and His History in the Tamil Land*, Madras, 1941; K. A. Nilakanta Sastri, *Development of Religion in South India*, Madras, 1963; do., *A History of South India*, Madras, 1955; J. A. Dubois, *Hindu Manners, Customs, and Ceremonies*, Oxford, 1906. などがあるが、宗教・哲学・思想の政治イデオロギーとしての役割及びその変動に関する研究はほとんどみられない)、ヴィジャヤナガル、マドゥライ、タンジール、ティルチー等におけるヒンドゥ寺院の復興、建立、或いは、ダルマシャーストラ・ヴェーダの注釈作業など、少なくともヒンドゥイズムの受容とその普及にヴィジャヤナガル王朝が力を尽していたことは考えられる。(もっとも、ロミラ・ターバルのように、だからといって、ヴィジャヤナガル王朝がヒンドゥ教復興を意図していたとはいえないという論点もあるが。(ロミラ・ターバル、辛島他訳『インド史』2、みすず書房、一九七二)ともあれ、ここで、支配原理と身分制、或いは支配秩序と社会集団との関

係という視点から中世南インド社会の特質をみようとする時、南インドの諸地域の社会集団がカーストの階層・親族形態・宗教儀礼・慣習をどれ程とり入れていたか、ということは、南インドの中央支配体制の中ほどの程度組み込まれているかを示すクライテリアになるのではないか。つまり、「カースト化」は、南インド諸地域へのヴィジャヤナガル王朝（或いはそれ以前の王朝）の浸透を示す一指標といえることができるのではないか、ということである。逆にいえば、部族的形態、部族的結合組織、部族的支配体制を保持している社会集団が明確に存在しているとすれば、これまで南インド中世政治史研究（すでに前掲拙稿論文で主要論文は指摘しておいた）で一元的に考えられていた「封建制」概念は再検討されねばならない。何故ならば、それらの視点の中には、下部構造としての部族集団と部族長、有力部族と他部族との関係、及びナーヤカ領主国と部族領国との関係、上部構造としてのヴィジャヤナガル王国国王ラーヤと部族長との臣従関係、軍事長官・行政長官ダンダーナーヤカを頂点とする官僚機構と部族長との支配関係が欠如していたからである。

さて、ここで問題となるのは、部族とカーストのクライテリアである。この点をまず考えてみたい。

『インド国勢調査報告書』（一九一一年）の「カースト・部族・人種」によれば、次のように定義されている。

「四六九条 ……カーストの最も顕著な特徴は族内婚と共飲関係である。……最も明らかな結びつきは同一の名前、同一の伝統的職業の共有である。……共通の名前、共通の職業の他に、

更に同一の守護神、同一の社会的地位、同一の儀礼遵守、同一の同族守護神が加われば、自他ともに『カースト』として認められるのである。……」

「四七三条 原初的形態としての部族は次の点でカーストとは異なる。すなわち、その基盤は経済的・社会的なものよりも、むしろ政治的なものである。（集団の）成員は、彼らがみな同一の起源であると信じてはいるが、彼らを結合させるのは、利害の共同性、相互防禦の必要性である。……部族とは特定の職業と結びつきはしないし、お互いの制約もない。必ずしも族内婚でもない。もつとも大いの場合には、同族の者が他の者に娘をやりたがらない為に、族内婚になるのだが。……長期にわたってヒンドゥイズムと接触を続けてきた部族は、自らの原初形態を変え、通例のカーストのパターンに程度の差こそあれ同質化してくる。そして、カースト制度と関連する様々な制約をとり入れるようになる。時にはこの過程が進行した結果、部族が一つのカーストに転化することもある。……」

カーストと部族の定義については、更に幾つかのヴァリエーションがあり、儀礼上の位置や役割、浄・不浄関係によって規定する方法もあるが、ここでは、職業・守護神の同一性、族内婚をカーストの基準とするのに対して、部族は、むしろ政治的結合のあり方そのものに力点がおかれていると考えてよからう。

そこで、マラヴァ集団について、婚姻形態・守護神・部族内職業の三つの側面から考えてみたい。

まず、H・A・スチュアートによれば (*Madras Census*

Report, 1891)「マラヴァ集団はマドゥラ及びティンネルヴェリ県に主として居住しており、南インド南部に最も早くから定着していたドラヴィダ系諸部族の一つであり、且つカッラン族(Kallan)などにも、ブラーフマニズムの影響をほとんど受けていなく」集団であった。

また、F・ファウセットは、マラヴァ集団の一つコンダヤムコッタイ・マラヴァが、サブカーストの如く分枝しているが、その分枝形態と婚姻法則が、伝統的なヒンドゥイズムとは異なることを明示している。(Journal of Anthropological Institute, Vol. 33, 1903, in Castes and Tribes of Southern India, ed. by E. Thurston, vol. 5) すなわち、この集団は以下の六つの「部族群」＝「樹(kothu)」に分かれ、各「樹」は更に各々三つの「枝(=khlai)」に分かれています。

「樹」

「枝」

Milaku	(胡椒)	Viramudithanginam
		Sedhar
		Semanda
		Agastyar
Vettile	(ピーナズ)	Marruvidu
		Arakhiya Pardiyan
Themang	(ロコナツツ)	.....
Komukham	(アレカナツツ)	.....
Ichang	(なつめヤシ)	.....
Panang	(バルミラ)	.....

彼らが結婚をする相手は、自分の母方が属する「枝」以外の

者でなければならぬ。女の方は母方の兄弟とは決して結婚しえない。何故なら、両者の「枝」は同一と考えられるからである。他方、兄弟の子供同士は結婚しうる。それは、兄弟は当然同一の「枝」に属するにもかかわらず、その子供達は、相異なる「枝」に属すると考えられているからである。これに対して、南インドのカースト集団では、一般的に、娘の相手となる男は、娘の母方の兄弟又はその息子である。この点において、マラヴァの婚姻関係のあり方は、独自であり、カースト集団のそれとは異なっている一つの要素といえる。

次にマラヴァの守護神をみてみよう。

『マッケンジー写本要録』に収録されている「マラヴァジャーティ伝承」には、マラヴァの守護神十三種類をあげている(Mackenzie Manuscript No. 55, T. V. Mahalingam, ed. Mackenzie Manuscripts, vol. 1, Madras, 1972, p. 236)。

- ①Karuppanan, ②Bhadrakali, ③Candankkaruppan,
- ④Muttukkaruppan, ⑤Virabhadran, ⑥Sankilikaruppan,
- ⑦Muniyisvaran, ⑧Ayyanar, ⑨Ariyavan, ⑩Samian,
- ⑪Karunadan, ⑫Padinettampadikkaruppan, ⑬Madurai-viran.

このうち、①は村の守護母神の脇侍として祀られる男性神であるが、時には、別個にアウトカーストのバライヤによって守護神として崇拜される場合もある。②はシヴァ神の妻カリー神の別名であるが、ドラヴィダ系の山間部族の間では、村の悪霊をとり扱う土着的なデモン信仰の一つであり、三年毎に、六・一二月の三回にわたり、この女神に人間の供犠を捧げること

がならわしとなっていた。この神及び信仰形態は基本的には反ブラーフマニズム的だと考えられている。<sup>⑬</sup>は本来南インドの伝承にあらわれるマドゥラライの武人であり、転じてマドゥラライ地方の地方守護神となっている。その他、<sup>⑭</sup><sup>⑮</sup>はティルチー地方の、そして、<sup>⑯</sup>はカナラ地方の極めて土着性の強い村の守護神である。(Henry Whitehead, *The Village Gods of South India*, Oxford, 1921, pp. 33, 77-8, 86-7, 104-5) ヲラヴァではシヴァ神の崇拜が一般的と考えられるが、しかし同時に右で概観したような、南インドの特定地域にしか存在せず、しかもその地域においてしか、神としての名称も役割ももてない守護神が多く崇拜されていた。

マラヴァの集団とその職掌については、例えば、ブネーデューポアは「マラヴァの国の支配者は同じカーストに属している。彼らは盗賊を生業としてゐる……」と記し、(Abbe J. A. Dubois, *ibid.*, p. 17) また、『マドゥラライ県誌』の「カースト分類によつてカットン」ともに「盗賊を伝統的職業とする」<sup>⑰</sup>「犯罪者カースト・部族」に入れづゝる(W. Francis, *Madura District Gazetteer*, vol. 1, Madras, 1914, p. 90)° E・サーストンも、「(ラムナード) 全県一五万人のマラヴァのうち、一万人は盗賊を業とし、四千人はそう推定されている」ことを指摘してゐる(E. Thurston, *op. cit.*, vol. 5, p. 31)° しかしこのような職業規定は、イギリスの支配が確立しつつある一九世紀初期から、支配を確立し、南インドのほぼ全域を東インド会社の支配機構の中に組みこんでしまつた一九世紀末の記録である。すなわち、ここには、地域の住民とマラヴァとの関係より

も、むしろ、支配権力東インド会社(及びその後のインド政府)とマラヴァ集団との関係において、カースト及び職掌を規定するという状況が反映されている。実際、E・サーストンも、マラヴァ(ン)の職業は本来、「武力によつて周辺の村々の治安を維持し、それに対して村々から一定の報酬を得ていた。……彼らの『村守護役(Kavalgar)』としての職掌は村々で認知されてきり、恐れる者は誰もなかつた。」と云う(E. Thurston, *ibid.*, pp. 28~31)° この点について、S・カディルヴェル氏はマラヴァの「伝統的」職掌(少なくともイギリス東インド会社によるカースト規定によつて、マラヴァ集団が「犯罪者部族・カースト」に分類される一九世紀中葉まで)は、村そのものを守護する武装集団としての役割(Shalam Kaval)及び、数カ村、数十カ村を一つの地域とし、その地域を保守する武装軍団(Desa Kaval)の二つを兼ねており、村内及び村と村との紛争、村外からの侵略などはすべて、これらどちらかの役割によつて解決されたと云う(S. Kadhivel, *A History of the Maravans*, Madurai, 1977, pp. 17~21)° このような軍団組織によつては、必ずしも十分な史料はないが、軍団内でのマラヴァ成員の果す役割と扶持について、例えば、シヴァガンガ、ラムナードの各地方では、槍持ちと刀を持つ者には、五カラムの種子を播く土地を授け、マスケット銃を持つ者には、七カラム、サンジャリ砲の砲手には一四カラム、一〇〇人の歩兵を指揮する者には五〇カラム、五〇人の歩兵を指揮する者には二五カラム、サルボジ(Sarboji)銃の銃手には九カラムの土地を、授けることが規定してある。このような扶持は、マラヴァ



の全土で行なわれており、マラヴァの成員は平時においては、扶持として与えられた土地を耕やし、一カラムの土地当り五ファナムの地代を族長に納めることが決められていたという (Mackenzie Manuscript, No. 55)。『マッケンジー写本要録』にはパラヴァに属する他の集団、例をば、ウプカッティ・マラヴァ (Uppukkati Marava) / コンダイヤンコッタディ・マラヴァ (Kondaiyankotai Marava) / マッパヌール・パラヴァ (Appanur Marava) も「武装守護職 (Amarakkaran)」であると同時に、その職掌に対して与えられた一定の扶持 (Kavai-Imirasu) の所有者であり、耕作者であることを記録している (T. V. Mahalingam, ed. *ibid.*, pp. 238~241)。右の断片的史料からマラヴァの職掌と地域における役割を断定することは困難であるが、少なくとも、彼らの集団が武力を持ち、武人としての役割に応じた土地の賦与及び耕作、更に村及び村集団から成る一定地域の守護にあたったことが推定されるのである。

以上、同族形態、守護神、職掌の三つの側面からマラヴァ集団の一六―七世紀の特質を検討してきた。部分的な実証ではあるが、マラヴァがカーストよりも部族集団の要素をより強く保持していると考えうるのではないだろうか。(重松注、以下同)

(3) 〈マラヴァ集団の改宗と政治状況〉

マラヴァ部族のイエズス会への改宗は、単に、南インドのキリスト教人口の増大のみならず、一七世紀末の南インドの政治状況に深刻な影響を及ぼした。

当時、マドゥライ及びタンジョールの両ナーヤカ領国体制と一線を画していたマラヴァの族長 Raja Surya Thevar は、

両ナーヤカの戦争の際、マドゥライナーヤカに対抗してタンジョール側についた為、捕われの身となりやがて獄中で死んだ。その跡を、同族長の第五番目の妻の子であり、軍事長官であった Raghunatha Thevar (後〇 Kilavan Sethupathi) と、先々代の族長 Thirumalai Sethupathi の近縁にあたる Padriya Thevar とが争ったが、結局、前者が一六九三年に族長 (Sethupathi) の座を占めた。

この間、プリト神父はマラヴァ国内で精力的に布教活動を行ったが、その結果、一六八六年の「マラヴァより総管区長宛布教に関する年次報告」によれば、イエズス会の信者は前年の二倍にも増大したという。しかも重大なことは、これまでの改宗者が主としてパラヴァを主体とする低カースト層であったが、今回の布教によって、マラヴァの宮廷貴族や有力支配者の中からも信者を得たことである。同年次報告によれば、マラヴァの宮廷婦人一名、族長ラグナーター・デーヴァルの従兄弟一名、騎兵隊長チンナ・ブバラ・デーヴァルも含まれていた。しかも、イエズス会への入信者の大多数は、ラグナーター・デーヴァルを族長とすることに反対する一派の者であった。しかも、彼のライバルであったタディヤ・デーヴァルが自らイエズス会の信者として洗礼を受けた為、族長ラグナータにとっては、二重の脅威となった。一つは、宮廷内の支配権をめぐる権力闘争が、多数のイエズス会信者を宮廷内外から出すことによって、ヒンドゥ教徒マラヴァとキリスト教徒マラヴァの二つの勢力間の対立へと展開しつつあったからである。マラヴァ族、タンジョールのナーヤカ、マドゥライのナーヤカという三つの領国間の拮抗

関係の中でマラヴァ族内のキリスト教信者の増大は獅子身中の虫であり、内部の族的結合を弱化させる危険性を、族長ラグナータは理解した。その為、一六九三年一月八日、フリト神父を処刑することになるのである (S. Kadhivel, *ibid.*, pp. 33~44)。

- (4) Tadiya Thevar, Siruvalli の領主。(c) を参照。  
(5) Raghunatha Thevar 又は Kilavan Sethupathi。マラヴァ王国の族長。(c) を参照。  
(6) Jean という名のキリスト教徒については不明であるが、バラモン出身のキリスト教改宗者があらわれたことは重要な意味を持つ。本書簡中にも言及されているようにバラモンとイエズス会との間の確執は激しく、前者はキリスト教の布教を「秩序破壊の行為」として、しばしば攻撃していた。従って、イエズス会の布教の対象は、当初はいわば「秩序」外のアウトカースト層におかれていたが、一七世紀後半、次第にマラヴァ及びバラモンの改宗にむけられることによって、新たな布教の段階を迎える。
- (7) Hanumanthagudi ラムナードの北三七・五マイル。ラムナード県ハスマンダグディ郡の郡都。一六七三年マラヴァ族長ティルマライセトウパティによるムスリムへの土地寄進を記す

石刻文がある (R. Sewell, *Antiquarian Remains in the Presidency of Madras*, vol. 1, 1882, p. 298)。

- (8) Ramnathapuram 又は Rannad。マラヴァ王国の首都。ラグナータセトウパティは、マラヴァ王国の首都をポガル (Pogalu) からラムナードに移した。
- (9) Puli Thevar of Nerkatumseval (c)。  
(10) Patala Gayatri ガヤトリとはヴェーダの最も神聖な文句であり、至高の神としての太陽に対する祈りである。「メタラ(この地の最も底部にある所)に栄光あれ、この地に栄光あれ……」と頌われる (cf. Abbe J. A. Dubois, *ibid.*, pp. 255~256)。  
(11) 「最高の者」*śarvaśva* の「支配者」を意味する Sarve'svara  
(12) Ouriya Thevar  
(13) Orayur。シヴァガंगा (Sivaganga) の三七マイル東方、タムナードのセトウパティは崩壊する (R. Sewell, *ibid.*, p. 297)。  
(14) Panvar 川。  
(しげまつ) しんじ 名古屋大学文学部助教授  
(あまの ちえこ) 名古屋大学大学院博士後期課程  
(たかぎ いさお) 名古屋大学大学院研究生